

令和元年度 筑波大学附属久里浜特別支援学校 自閉症教育実践研究協議会を開催しました

12月6日（金）、7日（土）の二日間、本校と独立行政法人国立特別支援教育総合研究所講堂等を会場にして、自閉症教育実践研究協議会を開催しました。

1日目は、授業公開の後、各学級の授業について授業研究会を行い、活発な意見交換をしました。その後、会場を講堂に移し、今年度の本校の研究である体育の授業づくりについて、PDCAサイクルを通して、教師の関り方の工夫や教材研究、子供の理解に応じることや、題材と子供の生活とが関連することが大切であることを発表しました。続いて小学部3年と小学部5・6年から実践報告をしました。小学部3年の授業づくりでは、リボンを使用した表現運動のPDCAサイクルを通して、教師と楽しく体を動かす友達の姿に影響されて児童の表現が豊かになってきたことが報告されました。小学部5・6年は、ボール遊びやボールを使った運動の実践を発表しました。教師が子供を理解し、共感的に関わることで、子供が手持ちの力を発揮し、自分から工夫して体を動かしたり、新しい動きを獲得したりする変容が見られたことが報告されました。指導助言の筑波大学体育系教授松原豊先生からは、新しい学習指導要領の体育の考え方や、幼児、児童にとっては、周囲の人の動きを見ることも大事な学びであること、そのことを通して、教師や友達と一緒に活動したり自分から活動したりすること等をお話いただきました。



授業研究会の様子

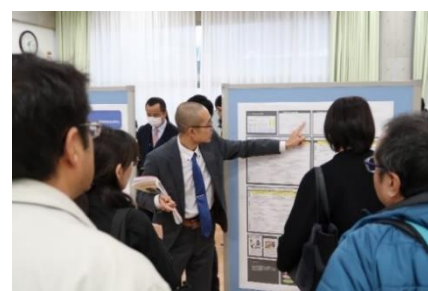
2日目は、本校で幼稚部から小学部6年までの9年間学んだ児童についての事例報告や、小学部2年の自立活動の指導について事例発表を行いました。9年間の事例報告では、子供の興味・関心のあることから、人との関わる力や、物事を理解する力を育て、活動の意欲を育んできたこと、また、家庭と連携しながら、その時々の子供の実態や課題に合わせた指導を模索してきたことを報告しました。また、自立活動の事例では、教師に合わせてもらう心地よさや楽しさを感じることを大事にした関わりをすることを通して、児童が持つ力を発揮し、言葉や身振りなどで表現する力を伸ばし、やり取りや関わる人が広がってきたことを発表しました。



事例報告の様子

筑波大学人間系教授野呂文行先生には、日々の児童の記録を教員同士が共有して子供の育ちを評価し、次の日の授業を見直していくことの大切さや、幼稚部から小学部への効果的な引き継ぎについて検討する必要性を指摘していただきました。京都大学国際高等教育院准教授田中真介先生からは、子供が大人の働き掛けを拒否する等、一見、否定的に見える子供の行動には、次の発達段階に向けて力を蓄えたり、「助けてほしい」というメッセージが込められていたりするなど様々な発達の良さがあることを教えていただきました。

その後、教材・教具展示とポスター発表がされ、参加者の皆様とより近い距離で、活発な意見交換ができました。



ポスター発表の様子

最後に、いわき短期大学特任教授、筑波大学名誉教授前川久男先生の「人と人との関わり合いを通して、学ぶことの大切さ」という演題で御講演をいただきました。私たちは、人と人との間で関わり合って生きており、子供は教わって何かを得るのではなく、大人とやり取りすることや、一緒に活動することを通して学んでいること、その上で、子供と大人がお互いに言葉や動作などに意味を作り出して、互いに完成させ合っていくことのお話いただきました。子供の表現をまずは大人が受け止め、「そうだね。」という気持ちで引き受けていくことや、その子供にとっての意味を作り出していくことを大切に、授業づくりや生活づくりを行っていきたいと思います。



全体講演 前川先生

御参加いただきました皆様、ありがとうございました。今回の実践研究協議会の議論を踏まえて、今年度の研究を研究集録としてまとめ、3月中旬に御参加いただいた皆様のもとにお届けします。また、実践研究協議会に参加されていない方で、研究集録を御希望の方は、kyougikai@kurihama.tsukuba.ac.jp（担当者：飯島）までお知らせください。